

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 中戸 照恵

本論文は、生成文法理論に基づく言語獲得研究で、英語と日本語について身体部位名詞BPNを目的語とする構文に焦点をあて、日本語児と英語児に対して当該構文の意味解釈に係わる獲得実験を行って得られた知見に基づき、普遍文法に関する仮説である原理と媒介変数によるアプローチにより名詞句の内部構造の獲得過程に対する理論的な説明を探り、言語獲得にかかわる文法の仕組みとそれを律する言語獲得機構における原理の解明をめざしたものである。

本論文の構成と研究成果は以下の通りである。本論文は、①論考の基盤とする理論的枠組みと研究対象とする言語事象および研究課題を提示した第1章、②当該構文が大人の文法で目的語の表す身体部位が主語の表す所有者と分離されえず譲渡不可という解釈と身体部位が主語と分離し別の所有者に属する譲渡可という解釈を持ちうることを主語と目的語の指示の依存関係に起因すると考え、述語再帰標示による束縛理論によって説明可能であると論じ、当該構文ではBPNと動詞で複合述語が形成されうるとする名詞編入分析を提案し、さらに、BPN目的語構文の形態・統語特性にみられる言語間変異を説明しうる媒介変数や形態標示に誘発される含意計算を提示して理論的説明を試みた第2章・3章、③言語獲得過程で働くと考えられる2つの経済性の原理(表現化の経済性と表示の経済性)に基づき、当該構文の統語・意味特性の獲得過程で予測されうる様相を理論的に考察した第4章、④日本語児と英語児を対象とし、非BPNや数・性の情報を担う所有代名詞も含めた実験立案で、BPNの先行詞(所有者)の選択に寄与し譲渡不可の解釈に係わる要因を探った5つの獲得実験結果の検討から、日・英語児いずれでも譲渡不可の解釈が大人よりも強く好まれ、英語児では数・性に関する情報の獲得が遅れるという知見を得た第5章から7章の考察に基づき、英語児がどのように名詞句の内部構造を獲得して大人の文法に至るかを論じ第8章、⑤獲得実験の成果により、提示した分析(経済性の原理、述語再帰標示による束縛理論、名詞編入)が支持されると結論づけた第9章からなり、詳細な獲得実験の資料が付録とされている。

本論文で問題とされた身体部位名詞目的語構文については、これまで、英語・日本語いずれにおいても妥当な分析案は提示されておらず、また、当該構文について、日本語と英語の形態・統語的相違に着目して譲渡可・不可の解釈の獲得の様相は研究されておらず、日米で丹念に実験を行って日・英語の大人の文法と子供の文法の類似点と相違点を明らかにした実証的研究として高く評価されるものである。

本論文は、実験結果の解釈について検討を要する部分もみられるが、言語獲得研究に対して多くの理論的貢献をなしうる労作であると評価された。よって、本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するのにふさわしいものであるという結論に達した。